

作家 朝井 リョウ氏に聞く

聞き手 山岡 三子●フリーアナウンサー・名古屋短期大学客員教授

山岡 本日、お話を伺いするのは、作家の朝井リョウさんです。早稲田大学二年生のときに『桐島、部活やめるってよ』で小説すばる新人賞を受賞。ベストセラーになり、現役大学生作家として注目を集めました。

その後も、男子チアリーダーینگ部を取材して執筆した『チア男子!!』や『星やどりの声』など、在学時代に立て続けに五作品を発表。一般企業に就職してからも執筆のペースは衰えず、コンスタントに作品を発表し続けていらつしやいます。

さらに、今年の一月には、直木賞を受賞されました。男性としては最年少であり、同時に平成生まれでは初めての受賞、本当に快挙ですね。おめでとうございます。

朝井 ありがとうございます。

山岡 あれから、四カ月がたちました。受賞後、何かご自身や周囲に変化はありましたか。

朝井 直木賞は、やはり知名度がこれまでと違いますから……。周りの友人たちもそれまでは「お前が作家なんて、信じられない」といった反応でしたが、これでやつ

と「ほんとに作家だったんだね」と認識してもらえたようになったかなって思っています。

ただ、僕自身は何も変わっていないし、そもそもデビュー時から現実感が乏しいんです。あれだけたくさんの方々に囲まれて、会見までやりながら、しかも、こうして今、インタビューを受けていても、何か、自分のことのような気がしないんです。

作家、そして会社員

——受賞翌日は会社の会議

山岡 それは、朝井さんご自身が、作家としての顔のほかに、会社員の顔もおもちでいらつしやることも関係しているのでしょうか。受賞の翌日も、普通にスーツを着て出勤なさったんですね。

朝井 受賞当日は、会見やら選考委員の方々へのあいさつやらで、結局夜中まで活動していました。だけど次の日も平日だったので、会社に行って、長時間の会議に出席していましたね。

直木賞をいただくなんて、僕にとっては非日常の出来事ですが、そこにひたること



朝井リョウ氏（右）と山岡さん
(2013年5月18日 ㈱新潮社会議室にて)

ができない。舞い上がりたくても舞い上がれない。そうした環境がかえって良かったのかもしれない。

仕事のおかげで、うまく精神のバランスがとれているように思うんです。どれだけ舞い上がるようなことが起きても、会社のことを考えると気持ちも落ち着きますし。

山岡 私から見ると、男性としての最年少受賞なのですから、もっと舞い上がってもよさそうに思うのですが、現実をとてモクールに、淡々と受けとめていらっしゃるようにつながるので。

朝井 例えば、もし僕がテニスの選手であるとか、はっきりしたルールのもとで結果を残したのだとしたら、多少舞い上がってもいいのかもしれませんが、でも、出版の賞というのは、明確なルールがあるわけではありません。誰が見ても納得する形で勝敗が決まる世界ではないんです。実際に、ほかの候補者の作品のほうが直木賞にふさわしいと思っている人がいることも知っています。誰もが納得する点数制の評価ではない中で、人が人を選ぶわけですから、なかなか浮かれていけないんです。いくら

最年少ですすごいと言われても、それは年齢というたった一点からの評価なので。

山岡 直木賞の受賞となった『何者』は、大学生の就職活動を扱った小説で、ツイッターを中心に、SNSのやりとりを果的に作品に登場させています。ツイッターは、私の世代ではあまりなじみがないので、それがかえって私には新鮮でした。

朝井 ツイッターを全面的に扱った初めての小説という見方もされました。でも、今の大学生の日常を書くこうと思ったら、ツイッターを出さないのはむしろ不自然だと思っんです。

ご飯を食べるために箸を使うのと同じレベルで、ツイッターは大学生の生活の中に溶け込んでいるんです。だから、単に流行り物だからツイッターを取り入れたというわけではないんです。

ツイッター、フェイスブックの副作用

山岡 ツイッターが世の中に登場してあまり時間がたっていないのに、それだけ浸透していることに驚きました。ツイッター

やフェイスブックが出現して、大学生のコミュニケーションは変わったのですね。

朝井 急速に変化していますね。最も大きな変化は、周りの目を常に意識するようになったことです。

何げなくテレビを見て、ツイッターでつぶやく際にも、単なる独り言では満足できない。何かおもしろいことを言わなくちゃという強迫観念がある。リツイートの数、フェイスブックの「いいね」の数も意識しないわけにはいかないし、誰かと競うような感覚になってくるんです。

山岡 テレビ番組の感想まで、意識しなければならぬんです。

朝井 それが高じて「自分の人生はこんなに楽しいんだ」ということをアピールする空気が蔓延し始めました。それはそれで悪いことではないし、その段階でどまっていればよかったんですけど、最近は、少し悪い傾向が出てきているように感じます。

山岡 どういうことでしょう。

朝井 これまでは、「僕の日常って楽しいんだよ」という、上へ、上へと競う感じだったんですが、最近は、そうした人であ

ざけてみたり、小馬鹿にしてみたりという傾向が目立つようになりました。

つまり、「あなたの行動、おもしろくないね」とか「君のツイート痛いね」という批判が蔓延し出している。こうした下へ、下への競い方っておかしいし、そんなところに体力を使うのは無駄なんじゃないかという気持ちに僕ははすぐあります。

山岡 そうした下へ、下へと競い合う背景には何があると思われますか。

朝井 ツイッターは百四十字しか投稿できないのですが、その百四十字の裏には、多くの捨てられた言葉があるはずですよ。僕はむしろそちらのほうにこそ、その人自身がどのように思っています。その背景を想像せずに、表出している百四十字だけで、人を判断する風潮が出てきています。そこが問題のような気がしています。

前後の文脈を断ち切って、ある一部分だけをピックアップして、揚げ足をとる。それが僕にとっては居心地が悪くて、その違和感を小説の中に落とし込めたらという気持ちがありました。それが執筆の動機です。加えて、そうした状況が最も象徴的に表

れているのが「就活」だと思いましたから、これを小説の舞台に設定したわけです。

山岡 なるほど。特に、そうした面が色濃く出ているのが、小説の後半部分ですね。登場人物の本音というか、裏の顔がツイッターのつぶやきで作品の中に表れています。さらに、それが現実の世界に露見してしまい、主人公はものすごい批判を受けます。

正直、読んでいたたまれない気持ちになりました。その反面、ラストには、何か明るさ、前向きさを感じました。傍観者だった一人の若者が、挫折を契機に、覚悟をもって成長していくこうとする姿が垣間見られて共感できました。

就活、ツイッターを通じて

取り上げたかったのは普遍的な問題

朝井 就活とツイッターというキーワードを並べると、若者に向けた小説と思われるかもしれませんが、僕としては、とても普遍的な問題を書いたという思いがあります。誰もがぶち当たる悩みや心の奥底の部分を書きたかった。

だから、若者だけではなく、どの年代の

人にもまったくさな気持ちで読んでもらいたいですね。

山岡 インターネット上のブックレビューなどを見ると、「ソーシャルメディアを使うすべての人に開かれた小説」「社会風刺の小説」「青春群像小説」など、各年代層によっていろいろな読み方がされている。読者によって感じ方もそれぞれ異なる、膨らみのある作品だなと、あらためて実感しました。

ところで、気になるのは、朝井さんご自身の就活です。私も学生に就職指導をしていて、就活は、学生にとってその後の人生がかかっている、最も関心の高いテーマの一つになっていると感じています。経験者として何かアドバイスはありますか。

朝井 これは一般論ですが、就活のときに触れる大人って、学生にとっては超すごい人ばかりなんです。ただの若手社員ですら、とても手の届かないところにいる「神」のように見えてしまうんです。

さらに、学生は対面する面接官から判断を下される側だし、着慣れないリクルートスーツを身にまっています。服装ひとつ

とっても、立場の違いは歴然です。

目の前の面接官でさえ、何から何まで違う、別の星の人という感じで、仰ぎ見てしまっている。それで、より良く見せよう、背伸びをしようと意識しすぎて、自分を見失っていくパターンが多いように思います。

ただ、こう言うときと少しいやらしいかもしれませんが、僕自身は、面接で落ちたの是一次だけで、とてもうまくいったんです。なぜだろうと振り返ると、学生時代からこうしてインタビューを受けさせていただったり、出版社の編集の方と打ち合わせをしたことが多かったと思います。大人と触れ合う機会が多かったということです。

「学生」と「社会人」「大人」との垣根を外す就活を

山岡 だから、緊張しないし、ものおじもしなかったと。

朝井 ええ。どこかで、社会人も自分たちと同じ人間だということがわかっていただんだと思います。そうした見方ができれば、プレッシャーも小さくなる。

山岡 対策としては、普段から大人と触

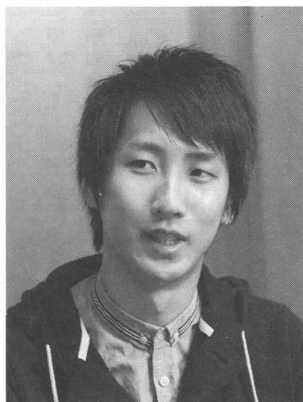
れ合う時間をもつことが重要になりますね。個々の大学でも、社会人を招いてイベントを開くなど、いろいろ対策を講じています。

朝井 ただ、それも難しいんですよ。

社会で活躍する方々を招いて、大学で講演会を催したとしても、それで「学生」対「社会人」という垣根がなくなるわけではありません。やはり、学生としては、その人たちを自分たちより一段上の「大人」として見てしまいがちです。

それよりも、極端に言ってしまうと、社会人と合コンをする。ぐらいいの付き合い方、交流の仕方をしてみたほうがいいように思えます。人間対人間の触れ合いです。面接官だって本当は若い学生たちと合コンしてみたいし、遊んでみたいと思っているはずなんです。就活に励んでいる学生には、面接官にも三大欲求があるという発想がありません。そういう発想が、まずはその発想を変えることが大事だと思います。現実的な解決策になるかどうかわかりませんが、**山岡** ところで、朝井さんは非常に多作な作家というイメージがあります。事実、大学生のときには五冊も上梓されています

朝井 リョウ氏



し、社会人になっても出版のペースは落ちていません。

『何者』は社会人になってからの作品ですが、いつお書きになったんですか。

朝井 社会人になりたての昨年四月から七月までの四カ月間です。

僕はあらかじめ、設定を細かく決めてから書き始めるんですが、そのプロットが細かいところまでできれば、書く勢いも増してくる。あの作品は、研修中から配属直後ぐらいにかけて集中的に書きました。

山岡 仕事をしながらの執筆は、大変だったのではないですか。

朝井 毎朝五時に起きて、七時半まで書くという生活のパターンが確立されている

ので、何とかやれています。確かに、執筆時間は制限されますが、むしろ集中力は増しているように思います。

執筆によって

「仮想敵」の既成概念を打破したい

山岡 そうした書き続ける原動力は、何なのでしょう。

朝井 原動力と言えば大仰な感じがしますが、僕の中に絶対に負けたくない「仮想敵」がいるんです。あくまでも「仮想」で現実の人を想定しているわけではないのですが、根拠もないのに、「世の中はこういうものだ」としたり顔で発言する人っていますでしょう。

例えば「安定した月給を得ると、作家は創作意欲がわなくなる」というのもその一つ。そういうことを言う人は、そういう発言をしないと、ご自身がまっすぐに立ってられないんだと思うんです。そういう人に対して、就職しても本は出し続けたいし、僕の存在によって、そうした既成概念をもっている人を焦らせてやりたいと思っています。

山岡 そういう仮想敵の存在は、いつごろから朝井さんの中にあつたのですか。

朝井 デビュー直後かもしれません。当時、アマゾンのレビューで、かなりたたかれたんですよ。そのときに、自分の中でそうした仮想敵の存在がむくむくと大きくなっていたように思いますね。僕自身は、その仮想敵を「あいつ」と呼んでいるのですが、今は頭の中にならなくなる「あいつ」を一人ずつ倒しているところです(笑)。

ただ、そうは言っても、書き続けるのって、本当は楽ではないんです。自分を追い詰めないと、四百枚も五百枚も書くなんてできません。

毎回、これを書いたら、次はもう書くことはなくなっちゃうんじゃないかと思うぐらいに、自分の中にあるものをひねり出して、出しきって、やっと書き続けている。そんな感じです。

それでもまた、次の作品を書くことするわけですから、作家とは、自分を追い込むのが好きな、マゾヒスティックな気質が強い人種なのかも考えたりします。

山岡 自分から書くことをやめなくなる

ことはないんですか。

朝井 それはありません。執筆中は苦しくて、その一方で、自分の本を出せることの幸せを、僕自身、強く感じていますから。こんな幸せなこと、世の中になかなかありません。

だって、編集の方のお力は借りますが、一から百まで、自分の頭で考えて文章を書いていく。そして、それ実際に読んでもらって評価されたり、映像にしてもらったりする。ほかの仕事では絶対に得られない喜びがあるんです。

山岡 その喜びが、執筆のモチベーションにもなっているんですね。しかし、お話を



山岡 ミヨコさん

とてもハードなことなんだなと痛感させられました。執筆には体力が必要ですね。

朝井 はつきり言つて、身体が一番の資本です。まだ二十代なので大丈夫かな、若いだけでどうにかなっているという感じがあるの、これから先はいろいろ氣をつけなければと思います。

小説家の原点は

日記に対する担任の先生のひと言

山岡 ところで、朝井さんは子どものころから、書くことが好きだったんですか。

朝井 小さいときから好きでした。何よりも決定的だったのは小学校六年生のときに、担任の先生から「朝井の日記は、小説を読んでいるみたいだ」って言われたことです。それがとてもうれしかった。と同時に、書くことそのものに備わっている、ある種の力を感じたように思います。

自分よりも立場も年齢もずっと上の先生が、文章を通じて、同じ目線に立ってくれた。対等の一人の人間として感想を言ってくれた。先生のたつたひと言のコメントによって、いつか小説を書いてみたいという

気持ちが強くなっていったんだと思います。

山岡 作家朝井リョウさんを形作るうえで、とても大きな経験だったわけですね。それ以来、作家になりたいと思い続けてこられたのでしょうか。

朝井 作家を目指していることを初めて公言したのは、高校一年生の三者面談の場でした。そのときは、将来の遠い夢という感じでした。四十代、五十代になって一冊自分の本ができればという感じでしたからかなり、予定が早まりましたが、思い返すとタイミングも良かったと思います。僕が中学生のころに、綿谷りささんや金原ひとみさんが芥川賞を受賞して、だんだん作家という存在が身近になってきました。しだいに僕が挑戦してもいいかもという気持ちが強くなっていきました。

山岡 実際、それから数年後に、『桐島部活やめるつてよ』でみごとデビューされるわけですが、学生時代は、ひたすら執筆をするという毎日だったのですか。

朝井 いえいえ、そうでもありません。大学ではストリートダンスのサークルに入って、早稲田祭でも踊りましたし、とにかく

く昔から人前に出ることが好きなんですよ。

中学のときには生徒会長もやりました。

高校はバレーボール部のほかに、体育祭の応援団にも入って、学ランを着て踊っていました。ちなみに、団長だったんですよ。ただの目立ちたがりです。

山岡 それはすごい。とてもアクティブなんですね。「作家」というイメージにはそぐわないというか、意外な感じがします。

朝井 世の中には、小説家はアクティブではないという考えが浸透していますよね。

山岡 はい。あまりカテゴライズしたくはないのですが、何か人前で表現するのが苦手で、だからこそ、心の奥底の部分を筆に込めて、というタイプの人が多いような印象があります。

朝井 そうですよ。だから、なおのこと、アクティブなまま小説を書くことで、そのイメージを壊したい。そう信じている人が大切にしている何かを壊したいんです。早稲田大学にも、活動的な人はあまりものごとを深く考えていないだろうと思われるところがありましたから、なおさらその思いが強くなりました。実際、文芸サ

ークルの人が文壇デビューするよりも、ダンスサークルの人がデビューするほうがおもしろいじゃないですか。

とはいえ、自分自身、早稲田大学の学生で良かったなという思いもあります。大学生って、高校のときに比べて時間が豊富にあるので、一年生のころは、田舎から出てきたばかりということもあって、ものごとの優先順位をつけずに遊んでばかりでした。早稲田という環境の後押しも受けて、小説のほうにギアを入れていったんですよね。

個性派ぞろいの大学では 自分だけの武器が必要

山岡 早稲田大学のどういう環境が良かったのですか。

朝井 早稲田って本当に個性的な人がいっぱいいるんです。だから、自分だけの武器をもたないと戦えない。そこで、興味の対象が広がる中で、何を捨てて、何を手に入れるかを考える機会をもてたことは幸運でした。それがうまく具合に、小説執筆への決意を強くしたように思います。

山岡 早稲田大学で、特に印象に残って

いる授業はありますか。

朝井 何といつても、三・四年生のときに所属した堀江敏幸先生のゼミです。

堀江先生は芥川賞を受賞された作家で、高校時代の国語の模試の問題で、先生の文章に初めて触れました。すごくおもしろくて、試験中だというのに、思わず読みふけてしまっただけなんです。

そのときに堀江先生のお名前をインプットしたのですが、進学先を決めるときに、先生が早稲田大学で教えていることを知り、堀江先生の授業を受けたいと思って志望したんです。だから早稲田大学は堀江先生が所属する文化構想学部しか受けてないです。ゼミでは、提出された学生の作品を回し読みして、感想を言い合ったり、テキストや映像を鑑賞して合評し合ったり、刺激的な授業でした。

山岡 『何者』を読んで印象に残ったのは、朝井さんの独特な文体です。とても描写が映像的ですし、あるシーンの中に、突然、説明もなく回想シーンがさし挟まれました。「現在」の時間の中に、「過去」の時間が不意に入り込む構造ですが、人間の意識

って、実際こんな感じだなんて納得させられました。そういう表現方法なども、ゼミでは指導を受けたのでしょうか。

ヒントだけでもいい、テーマを見つけ、研究し、極めるのが大学

朝井 堀江ゼミは、創作のゼミなのですが、そういう手とり足とり指導するということはありません。ただ、堀江先生は学生にヒントをいっぱい与えてくれるんです。あくまで、テーマを見つけて、研究したり、極めていくのは学生自身です。先生は自然な形でその後押しをしてくれました。

僕は本が出版されるたびに、直接お渡ししていましたが、必ず先生は読んでくださって、感想も伝えてくれました。作品の執筆で、なかなかゼミに出席できない時期もあったのですが、「今は、小説を書くことに集中したら」と、優しい言葉もかけていただきました。本当に先生には頭が上がりません。

そもそも、卒業できたのも先生のおかげです。ゼミでは卒業制作の提出が義務づけられているのですが、僕が提出した卒業制

作は、『星やどりの声』という出版された三冊目の小説ですからね。先生もこれを卒業制作として認めるために、かなり便宜を図ってくださったようです。

自分の作家としての将来を考えると、不安になることはありますが、先生のように、長く書き続けたいと思っているんです。すでに今後発表する小説の内容は決めていて七月に『世界地図の下書き』という小学生の話の刊行します。その次は、働いている三十代の女性。その次がアイドル。これまでもより創作色の強い小説にもチャレンジしていくつもりです。

山岡 では、最後に大学生に対してメッセージをお願いします。

朝井 今は、何か大きな解決策が見つけない時代だと思います。

就活だってそう。これだけ大きなシステムが確立されてしまった中で、学生たちだけで根本的に何かを変えることは難しい。グローバル化時代への対応も同じです。グローバル化が必然だといったって、世の中すべてがグローバル化する必要があるわけではありません。

学生の中にも、さまざまな意見がある中で、みんなが望む共通の解答を見つけることは不可能です。それは学生の皆さんも気づいていると思います。となると、やはり一人ひとりが工夫して、自分なりの最適解を見つけていくしかありません。

その際に重要になるのは、何をどう選択するかということです。その意味で、少々気になるのは学生の購買行動です。ITが発達したことで、僕より二学年ほど下の学生さんたちは、何でも無料で手に入れることができるようになりました。これはどうかなって、弊害が大きいのではないかなと正直思います。

自分が選んだものが気に入らなくても、無料で手に入れたものだとも腹も立ちませんよね。そうなるとう自分の感覚が正しいのか否か、自信がもてなくなるように思います。今のはほんの一例で、学生の皆さんには、何かを選択するときの主体性を大事にしてみたいし、その選択の感覚は研ぎ澄ませてほしいなと思います。それが人生を切り拓くうえで、とても大事なことのように思いますから。